

ヴェラーヤテ・ファギーフ体制とマルジャエ・タグリード制度

Velayat-e Fagih and Problems on Marja'e Taglid

富 田 健 次

Kenji Tomita

I. 序

1979年のイラン革命を契機にホメイニー師の下で樹立したヴェラーヤテ・ファギーフ体制は、過去数世紀にわたるイスラーム・シーア派の宗教制度の展開を背景に、その宗教制度上の宗教権威が政治的権威を奪取する形をとって成立した。しかし、宗教権威が政治権威を奪取したとはいえ、宗教権威が政治的権威を兼ねることになったことはその宗教制度にも何らかの反作用をもたらさざるを得ないと考えられる。

かかる視点から小論ではまず、ホメイニー師死去後のマルジャエ・タグリードを巡る動きを概観した後、マルジャエ・タグリードとタグリードの細則、そして、統治理論の側面の考察を試みたい。

II. マルジャエ・タグリードを巡る動き

1989年、ホメイニー師が他界し、ハーメネイ師 ('Ali Khamene'i) が代わって最高指導者となった。ハーメネイ師は最高指導者に就任するとともに、宗教位階性の上でホッジャトル・イスラームから一ランク上がり、アーヤトollahになった。しかし、なお宗教界最高権威のマルジャエ・タグリードには至らなかったためにマルジャエ・タグリードであったホメイニー師の権能全てをハーメネイ師は継ぐことができなかった。原則として、一般信徒達は物故したマルジャエ・タグリードの信仰生活上の指針に従う、すなわちタグリードすることは禁じられている。このためホメイニー師をマルジャエ・タグリードとしていた信徒達 (モガッレド: moqalled) の要請を受けて、モハンマド・アリー・アラキー師 (Mohammad 'Ali Araki, 1894年生) が新たにマルジャエ・タグリードとして登場した。彼は故ホメイニー師をタグリードしていたモガッレドが故ホメイニー師にタグリードし続けることを許容 (jayezi)^①し、また故ホメイニー師に対する宗教税ホムスを継続して支払うことを認めた^②。

このモハンマド・アリー・アラキー師はマルジャエ・タグリードとしての能力を十分に備えているかどうか疑問視する向きもあった^③が、ホメイニー師の死後のシーア派宗教最高権威は彼を加えて次の人々から構成された。

①マルアシ・ナジャフィ師 (Mar'ashi Najafi, 1990年没)

②アブッルーカーセム・ホーイ師 (Abu'lQasem Kho'i, 1992年8月没)

③レザー・ゴルパーイガーニー師 (Reza Golpaygani, 1993年12月没)

④モハンマド・アリー・アラキー師 (1994年11月末没)

⑤ コミー・タバータバーイ師 (Qommi Tabataba'i)

⑥ ホセイイン・アリー・モンタゼリー師 (Hosein'Ali Montazeri)

彼らの内、アブッルーカーセム・ホーイ師はイラクのナジャフに在住し、ホメイニー師のヴェラーヤテ・ファギーフ論に賛成せず、政治に関与しない姿勢を採っていた。コミー・タバータバーイ師もイランのマシュハドにいたが、同様にホメイニー師が樹立した体制に反対する姿勢を採っていた。一方、モンタゼリー師はかつてホメイニー師の後継者の地位にあったものの、ホメイニー師の晩期にその地位から降ろされていた。このため、故ホメイニー師没後、イラン指導部は M.A. アラーキー師をマルジャエ・タグリードとして一般信徒に推す一方、イランのコム在住で、現体制に関して否定とも肯定ともその態度を明確にしないマルアシ・ナジャフィ師とレザー・ゴルパーイガーニー師に対して敬意を示し、問題のあるコミー・タバータバーイ師とモンタゼリー師の存在はこれを無視する姿勢を採った^{注4}。

しかし、この宗教権威達も年月の経過とともに異動が生じた。彼らのうち、高齢のマルジャエ・タグリード達は上記表にも示したように、ホメイニー師の後を追って次々と他界したためである。これらの事態に対してイラン指導部はマルジャエ・タグリードを失った一般信徒（モガッレド）に対して M.A. アラーキー師をマルジャエ・タグリードに推そうと努めた。例えば 1992 年、アブッルーカーセム・ホーイ師が他界すると、イラン指導部はそのモガッレド達に M.A. アラーキー師をマルジャエ・タグリードとして紹介し^{注5}、その傍らでレザー・ゴルパーイガーニー師の存在にも頼る姿勢をとった^{注6}。

1993 年 12 月 9 日、このゴルパーイガーニー師も他界した。このとき M.A. アラーキー師をマルジャエ・タグリードに推す一方で、イラン指導部内部ではハーメネイ師をマルジャエ・タグリードに推す動きが新たに生じた。ハーメネイ師をマルジャエ・タグリードに推した代表的な指導部要人は司法府長官：モハンマド・ヤズディ師 (Mohammad Yazdi) やメシュキーニー師 (Ali Meshkini) であった。例えばメシュキーニー師はシーア派のみならずスンナ派も含むイスラーム世界にハーメネイ師を単独のマルジャエ・タグリードとして受け入れるように呼びかけた^{注7}。また、モハンマド・ヤズディ師はマルジャエ・タグリードの資格として政治問題に通暁していることが従来の伝統的なマルジャエ・タグリードの資格よりも優先されるべきであると主張し^{注8}次のように述べている。

「マルジャエ・タグリードを決定する問題はイスラーム統治体制の樹立で従来と違いが生じた。以前は国内の各都市にマルジャエ・タグリードやハーケムが独立して存在しても、問題が生じることはなかった。しかし、ホメイニー師の指導の下、イスラーム法学者が統治する体制の樹立で、イスラームとその統治権維持が至上の義務となり、問題は別の様相を持つことになった。時代に通暁することは法学上の能力や公正さや敬虔さ同様に本質的な役割を持ち、マルジャエ・タグリードの基本的条件に数えられる。敬虔で公正な法学者でも、最も基礎的な社会政治問題を知らずして、果たしてマルジャエ・タグリード足り得ようか。」^{注9}。

しかし、マルジャエ・タグリードの従来からの資格を無視し伝統から逸脱した形でハーメネイ師をマルジャエ・タグリードに推すこの動きは強い抵抗にあった。例えばメシュキーニー師の呼びかけに対してはコムでこれに反駁する無記名文書がでまわった^{注10}。また、ハーメネイ

よる葬儀主宰はゴルパーイガーニー師の遺族によって拒否された^{注11}。これは間接的にハーメネイ師にゴルパーイガーニー師の後継者、すなわちマルジャエ・タグリードたる資格がないという意味あいをもっていた。ハーメネイ師をマルジャエ・タグリードに推す動きは結局、ハーメネイ師自身がM.A.アラーキー師をマルジャエ・タグリードとして受け入れたことでひとまず落ちつく^{注12}。

一方で、次々と他界し始めたマルジャエ・タグリードに替わって新しい世代のマルジャエ・タグリードが浮上した。イラクでは死去したアブッルーカーセム・ホーイ師に代わってその弟子ミールザー・アリー・シースターニー師 (Mirza 'Ali Sistani)、イラン内部では従来のコミー・タバータバーイ師、ホセイン・アリー・モンタゼリー師の他に、モハンマド・ルーハーニー師 (Mir Mohammad Rouhani)、また、力が及ばなかったもののアーヤトッラー・ナーセル・モカーレム・シーラージ師 (Nasser Mokarem Shirazi)^{注13}がマルジャエ・タグリードとしての地位を固める動きが見られた。モハンマド・ルーハーニー師はイラク、レバノン、パキスタンの多くのシーア派ウラマーの支持を得ていた。コミー・タバータバーイ師はレバノン、クウェイト、パキスタンおよびサウジアラビアの東岸のシーア派教徒の間に多くの支持者がいた。アーヤトッラー・シーラージ師は湾岸のアラブ・シーア派教徒の間に支持者を得ようとしていた^{注14}。

この間、イラン以外のシーア派教徒の間で分裂が生じ、レバノンのシーア派教徒の間でもヘズボッラーの精神的指導者シェイフ・ファドルッラー (Sheikh Mohammad Hosein Fazlallah) はイラクのナジャフに在住するミールザー・アリー・シースターニー師を選び^{注15}、イラク・イスラーム革命評議会議長のバーケル・ハキーム (Baqer Al Hakim)^{注16}やシャムスウッディン (Mohammad Shams Addin、レバノンのシーア派イスラーム最高評議会議長)とともにミールザー・アリー・シースターニー師を支持するようハーメネイ師への請願書に署名したと伝えられた。一方、レバノンのヘズボッラーの指導者ハサン・ナスロッラー (Seyyed Hassan Nasrallah) はハーメネイ師を支持した^{注17}。

1994年11月28日^{注18}に、M.A.アラーキー師が亡くなった時、かかる状況を受けてシーア派世界でマルジャエ・タグリードとして目される人々は次のようになっていた。

- ①モハンマド・ルーハーニー師：イランのコム在住。
- ②ミールザー・アリー・シースターニー師：アブッルーカーセム・ホーイ師の後継者、イラクのナジャフ在住。
- ③ホセイン・アリー・モンタゼリー師：イランのコム在住。
- ④コミー・タバータバーイ師：イランのマシュハド在住。

イラン現体制にとってはこれらマルジャエ・タグリードのいずれも問題があった。モハンマド・ルーハーニー師はコミー・タバータバーイ師と同様、ホメイニー師のヴェラーヤテ・ファギーフに異論をもち、ながく自宅監禁状態にあると伝えられていた^{注19}。イラク・ナジャフのミールザー・アリー・シースターニー師はその師アブッルーカーセム・ホーイ師と同じ立場を採るとみられた。モンタゼリー師は1984年にヴェラーヤテ・ファギーフに関する論著を著し^{注20}ヴェラーヤテ・ファギーフ体制自体に関して問題は無かったが、ハーメネイ師を最高指導者とする現指導部への忠誠に疑問符が付いていた。さらに、ミールザー・アリー・シースターニー

師がイランの統治権の及ばないイラクのナジャフに住むことにも問題があった。

憲法擁護評議会のジャンナティ師 (Ayatollah Ahmad Jannati) はこうした状況に対して懸念を表明し、全世界一億のシーア派教徒のマルジャエ・タグリードに非イラン人になることは受容できないと述べ、アラブ諸国ならびにパキスタンのシーア派教徒がイラク在住のミールザー・アリー・シースターニー師をマルジャエ・タグリードとして選ぶことに危惧感を示した。また、彼はヴェラーヤテ・ファギーフを認めない人物がマルジャエ・タグリードたる資格を持つことはできないと述べて、ヴェラーヤテ・ファギーフを支持しないウラマーがシーア派世界を指導する可能性にも懸念を表明した^{注21}。

かかる状況を背景に M.A. アラーキー師が他界するとイラン体制指導部は上記4名を除く形でハーメネイ師を含む次の7名のマルジャエ・タグリードを一般信徒 (モガッレド) に紹介することになった。まず、1994年12月1日、「テヘランの戦うウラマー協会」が声明を出して、ハーメネイ師を含む3名をマルジャエ・タグリードとして紹介し^{注22}、併せて故ホメイニー師に継続してタグリードすることをこの3名が許容 (jaize) しているとした^{注23}。さらにこれを追いかける形で「コム講師協会 (Jame'e ye Modarresin-e Houze ye `Elmie ye Qom)」が、この3名を含む次の7名をロジュ (roju') の対象として紹介した^{注24}。また、議員の150名もこれらのリストに同意する署名をした^{注25}。因みにこれら新規のマルジャエ・タグリードのうち、最高指導者であるハーメネイ師を除き、国外でも知られていたウラマーは唯一シェイフ・M. ファーゼル・ランキャラーニー師だけであった^{注26}。

コム講師協会が紹介した7名の体制推薦のマルジャエ・タグリード達
(※はテヘランの戦うウラマー協会が紹介した3名)

- ※1. シェイフ・M. ファーゼル・ランキャラーニー師 (Sheikh Mohammad Fazel Lankarani 1931年生^{注27})
- 2. モハンマド・タギー・バフジャト師 (Mohammad Taqi Bahjat 1911年生)、
- ※3. セイエド・アリー・フセイニー・ハーメネイ師 (Seyed `Ali Husseini Khamene'i 1939生)
- 4. シェイフ・ホセイン・ヴァヒド・ホラーサーニー師 (Sheikh Hussein Vahid Khorasani 1921生)
- ※5. シェイフ・ジャヴァード・アーガー・タブリージー師 (Sheikh Javad Tabrizi 1926生)
- 6. セイエド・ムーサー・ショバイリ・ザンジャーニー師 (Seyed Musa Shobairi Zanjani 1928生)
- 7. シェイフ・ナーセル・モカーレム・シーラージー師 (Sheikh Nasser Makarem Shirazi 1926年生^{注28})

その一方で、ハーメネイ師を単独でマルジャタグリードとする動きも見られた。司法長官モハンマド・ヤズディ師、憲法擁護評議会のジャンナティ師や各地の金曜礼拝導師、マドラセの講師、さらにレバノンのヒズボッラーの指導者セイエド・ハサン・ナスロッラーやカシミール、バングラディシュ、パキスタン、トルコ、など各地の宗教指導者達で、彼らはハーメネイ師を単独のマルジャエ・タグリードとして一般信徒に紹介する、あるいはハーメネイ師にマルジャエ・タグリードの受け入れを要請する書簡を出し、その数は100名以上に達したと報じられた (後部付表参照)^{注29}。しかし、12月18日、ハーメネイ師は次のように述べて、国外の要望

に対してはともかくとし、国内におけるマルジャエ・タグリードの役割を自ら辞退する。

「コムに行けばマルジャエ・タグリードに値する人物を少なくとも100名は見いだすことができる。……かつて、他に方途が無かった故に最高指導者の重責を引き受けた。また、それ以前にも大統領の任務を、ホメイニー師から代替のきかない義務(vajebe kafaiではなく vajebe `eini)であると説得されて引き受けた。……最高指導者の重責はマルジャエ・タグリードのその何倍も重たい。……マルジャエ・タグリードのリストに私の名が連ねられたことは事前には知らされていなかった。……もし、代替がきかないのならばマルジャエ・タグリードの責務を引き受けても良い。しかし、マルジャエ・タグリードにふさわしい人物が数多くいるからにはその必要はない。マルジャエ・タグリードの責務を負うことを私は拒絶する。ただし、国外においては別であり、私はその責務を負おう。そうしなければ、腐敗が生じる。彼らマルジャエ・タグリード達が国外の責務を耐えうると判断された時に私は横に退こう。今は私が国外のシーア派教徒からの要請を受け入れる。他に方途が無いからである。しかし、イラン国内ではその必要はない」^{注30}。

こうして、ハーメネイ師を連立の、或いは単独のマルジャエ・タグリードに推す動きが強まっていた反面、イラン現体制支持者の宗教界要人の間でも、モンタゼリー師をマルジャエ・タグリードに推す動きがあると伝えられた。例えばアブドルキャリーム・ムーサウィ・タブリージー師 (Abdol Karim Musavi-Tabrizi) や マフダヴィ・キャニー師 (Mohammad Reza Mahdavi-Kani)、前ホメイニー事務所所長タヴァッソリー師 (Tavassoli) などで、彼ら約20名が書簡を出し、モンタゼリー師はホメイニー師によって後継者から外されたものの、彼のマルジャエ・タグリードの資格はそのまま有効であると説いたと伝えられた^{注31}。

かつて第三期議会(マジュレス)の議員の内、80~100人がモンタゼリー師をマルジャエ・タグリードとしていると当時の議員が述べたことがあったが、モンタゼリー師をマルジャエ・タグリードに推す動きはゴルパーイガーニー師が亡くなった後の1994年1月に一時盛り上がり^{注32}、議会内(第四期)で論議を呼んだことがあった。さらに1994年秋、モンタゼリー師が指導部に対して出した一年前の抗議書簡が国外反体制派の新聞であるロンドン発行の Kayhan 紙などを介して漏らされ、これに体制指導部(ウラマー専門裁判所)が公けに反駁するという事態が見られた。これは現体制指導部が M.A.アラーキー師の死期が近づいたのを見て、モンタゼリー師の古い抗議書簡を敢えて公表・論駁し信徒たちがモンタゼリー師になびくのを阻止しようとしたものと解釈された^{注33}。これと関連して、M.A.アラーキー師が亡くなったあと、コム講師協会が発表した新規マルジャエ・タグリードのリストに対して、モンタゼリー師関係者がこれを侮辱する回覧文をコムで配布したとして、彼の家に群衆が押し掛け暴行を働くと言う事件も発生した^{注34}。

しかし、一連のイラン指導部によるマルジャエ・タグリード選出決定の努力は、マルジャエ・タグリードを選ぶ権利は信徒にあるという従来の伝統のために功を奏せず、シーア派信徒たちは、ある者はハーメネイ師を、ある者はコミー・タバータバーイ師を、ある者はモンタゼリー師を、またある者はミールザー・アリー・シースターニー師をマルジャエ・タグリードとして従っている状態になったと伝えられた^{注35}。シーア派内部の M.A.アラーキー師死去後のかか

る混乱状況の中で、国際的人権擁護団体アムネスティ・インターナショナルがシーア派宗教権威にたいするイラン体制指導部の処遇を人権問題として取り上げて1997年に報告書を次のような要旨にて発表する事態も見られている。

「イランでは少なくとも3名の高位宗教指導者が自宅監禁下にあり、その支持者達は拘束され拷問を受けている。一部の者は不当な裁判を特別法廷で受け、ある者は裁判をも受けずに拘束され、また、消息不明となっている。彼ら全てではないものの多くの者が良心に基づく政治犯である。かかる宗教指導者とその支持者に対する人権侵害はヴァリーイェ・ファギーフの絶対的権限やイラン・イラク戦争継続への反対、もしくは人権侵害批判、また、一部はハーメネイ師を高位宗教指導者として受け入れなかったということから生じている。彼らの多くは反革命、腐敗、不道德、非合法的行為、ウラマーの権威を損なう、似非宗教指導者と言った罪状を扱うウラマー専用法廷で裁かれ、長期投獄や死刑を含む重い刑罰を受けている。1980年代後半、モンタゼリー師の支持者数百人が逮捕され、少なくとも12名が処刑された。特に1995年以降、他の宗教指導者の支持者数百名も逮捕され、拷問を受けていると報告されている。1995年6月、大アーヤトッラー・モハンマド・ルーハーニー師が大統領ラフサンジャニー師宛に政府を批判する公開書簡を出したことで、治安当局はその末子ジャヴァードを逮捕し投獄した。大アーヤトッラー・セイエド・モハンマド・シーラージー師の支持者数百名と彼の縁戚もまた当局によって悩まされ、その多くが逮捕され拷問された。大アーヤトッラー・コミー・タバータバーイ師は13年間、大アーヤトッラー・セイエド・モハンマド・サーデグ・ルーハーニー師は12年にわたり自宅監禁下にある。大アーヤトッラー・ラストガーリー (Ya'sub al-Din Rastgari) は政府を批判した廉で数回にわたって逮捕され、拷問を受けた。1996年12月、彼は釈放されたが、そのままコムで自宅監禁下に置かれた」^{注36}。

ここでは「特に1995年以降、他の宗教指導者の支持者数百名も逮捕され、拷問を受けている」としているが、これは1994年末に M.A. アラーキー師が亡くなったことを契機にして宗教界内部の軋轢に拍車が高まった様子を窺せる。従来、シーア派宗教界内部の確執や軋轢が外部に漏れ伝わることも無いわけではなかったが、このように外部組織が公式に取り上げることは希有な事態と言える。

一方、現実成功したかどうかはともかくとして、最高指導者ハーメネイ師に宗教的権威を付そうとする声は、彼をマルジャエ・タグリードに推す声から、さらに単独のマルジャエ・タグリードへとエスカレートしていることが以上の流れから看取できる。

Ⅲ. タグリードに関する細則からの側面

次に視点を变えて宗教的細則 (foru'-e din) の観点からマルジャエ・タグリードとモガッレドの関係を見ることにする。ここに依拠した資料は主としてホメイニー師のファトヴァに基づきイランの一般市民用に解説した、コム・イスラーム教宣事務所発行の「イジュテハードとタグリードのアフカーム」である^{注37}。以下、そこにおけるマルジャエ・タグリードとモガッレドに関連する要点を纏めると次のようになる。

1. タグリード (taqlid) の対象となる行為領域

一般信徒のタグリードの対象から外れる領域は①宗教の基本：オスーレ・ディーン (osul-e

din)、ならびに②必須 zaruriat、確信 yaqiniat、事実判別 mouzu`at である。①のオスレー・ディーンのタグリードは禁止であるが、②は義務ではないと言う意味での許容になる^{注38}。

上記以外の分岐的規範 (foru`-e din) はマルジャエ・タグリードにタグリードすることが一般信徒の義務である。この分岐的規範は政治、道徳、文化、経済、社会、司法、刑法、儀礼的行為 (‘ebadat)、軍事そのほか全ての側面に及ぶイスラームのアフカーム (ahkam) である。

アフカームはイスラームにおける行為の命令全てであり^{注39}、大きく次の賦課的アフカーム (ahkam-e taklifi) と説明的アフカーム (ahkam-e vase’i) の二つに大別される^{注40}。

この内、賦課的アフカームは次の5種類に分かれる^{注41}。

①義務 (vojub)、例えば祈り (namaz) で、それをしないことは罰の対象となる^{注42}。

②禁止 (hormat)、例えば利子 (reba) で、することは罰の対象となる。

③推奨 (estehbab)、例えば夜の祈りで、することは報酬をうけるが、しなくとも罰はうけない。

④避忌 (karahat)、例えば熱い食物で、避けることは報酬をうけるが、罰を受けない。

⑤許容 (ebahat)、例えば自然水の飲用で、罰・報酬いずれの対象ともならない。

以上の五範疇の行為に関して、一般信徒 (モガッレド) は単に義務や禁止のみならず、推奨、避忌、許容に関してもマルジャエ・タグリードからタグリードすることが義務である^{注43}。

2. タグリードの義務を負う信徒

タグリードする義務を負う信徒すなわちモガッレドは次の条件をもつものである。

①成年に達し^{注44}、理性を備えていること。

②モジュタヒドではないこと。

③モフタート (mohtat) すなわち過ちを犯さないようエフティヤート (ehtyat) つまり慎重な行為を行う者ではないこと。

ただし、モジュタヒドがタグリードすることは禁じられるが、モフタートの場合はタグリードしないことが許容となる。

モジュタヒドは言うに及ばず、モフタートもまた、イスラーム法に関する専門的な知識が要求される。従って、そうではない一般信徒にとって、マルジャエ・タグリードに追従する義務がないものは①成年に達しない子供か②精神障害者ということになる。また、家族の成員が家長にタグリードすること、また、妻が夫にタグリードすることも認められず、家族内の義務能力者 (mokallaf) はそれぞれが独自にマルジャエ・タグリードにタグリードする事が求められる。

3. マルジャエ・タグリードの資格

マルジャエ・タグリードの条件は次の通りである^{注45}。

(1)男性であり、(2)成年であり、(3)理性(アグル)を持ち、(4)12イマーム・シーア派であり、(5)嫡出子であり、(6)存命中であり、(7)公正^{注46}であること。また、義務としてのエフティヤートに基づき(1)現世欲がなく、(2)他のモジュタヒドより有識度が高いモジュタヒドであること。

これら全ての条件を備えていないモジュタヒドをタグリードすることは、全くタグリードを行わなかったのと同じことになる。

これらの条件の内、(7)存命中であることに関しては、次のような細則がある^{注47}。

- ①まず、他界したマルジャエ・タグリードにタグリードすることは許可されない。つまり、成年になって義務能力者 (mokallaf) として新たにタグリードを始める者は物故したマルジャエ・タグリードにタグリードする事はできない。

ただし、すでに成年に達し、あるマルジャエ・タグリードにタグリードしてきた者はそのマルジャエ・タグリードが死去したとき次の選択肢がある。一つは存命中の別のマルジャエ・タグリードを選び彼にタグリードすることである。もう一つは新たに選んだマルジャエ・タグリードが出す許可の範囲で、他界したマルジャエ・タグリードにタグリードを継続することができる (baqa' と呼ぶ)。

従って故ホメイニー師にタグリードしていた者は存命中の別のマルジャエ・タグリードの見解やファトヴァに基づいて、故ホメイニー師をタグリードし続けることもできる。ただし、死去したマルジャエ・タグリードにタグリードをする場合、存命中のマルジャエ・タグリードからその旨のファトヴァを得なければタグリードしないことと同じことになる。

- ②最初のマルジャエ・タグリードが死去し、次に別のマルジャエ・タグリードにタグリードするが、このマルジャエ・タグリードも死去した場合、死者にタグリードする問題は死去したマルジャエ・タグリードにタグリードすることを義務 (vajeb) とするか許容 (jayeze) とする第三のマルジャエ・タグリードにタグリードしなければならない。もし、彼が死者にタグリードすること (baqa') を義務 (vajeb) とする場合、第一番目のマルジャエ・タグリードにタグリードすることができるが、許容 (jayeze) とする場合は二番目のマルジャエ・タグリードにタグリードを続けるか、存命中のマルジャエ・タグリードにロジュールする (roju' : 一部のシャリーア問題で他のマルジャエ・タグリードに見解を求めること) ^{注48} かのいずれかを選択しうる。
- ③死者にタグリードすることを許容 (jayeze) するマルジャエ・タグリードに従っていて、このマルジャエ・タグリードが亡くなった場合、そのままこの問題で彼をタグリードすることは許容されず、エフティヤートの状態で、存命中の最有識のモジュタヒドにロジュールすることが義務 (vajeb) である。
- ④死者にタグリードする者は宗教税ホムスやザカートの支払いに関して、この死者に対するタグリードに関するファトヴァを出したモジュタヒドに諮らなければならない。
- 次に、義務としてのエフティヤートとして、マルジャエ・タグリードは最も有識度が高くなければならないが、詳しくは次の内容を意味する ^{注49}。
- ①最も有識なモジュタヒドとは聖法を理解するにおいてその時代において他の全てのモジュタヒドよりも優れていることであり、諸問題においてその証拠と規定に、より通曉し、例やスンナにおいて情報がより多く、ハディースの理解度はよりすぐれ、演繹力はより強く、優れていなければならない。
- ②もし二人のモジュタヒドがおり、一人は信者相互間の問題に最も有識であり、もう一人は儀礼問題に最も有識である場合は、分野を分けてそれぞれのモジュタヒドにタグリードする。
- ③敬虔さよりも有識度がマルジャエ・タグリードの条件である。
- ④単に理論や法学においてのみならず、政治社会経済においても有識でなければならない。最も有識なモジュタヒドを探すことは一般信徒にとって宗教的義務 (vajeb) である。

かかるタグリードの対象となるモジュタヒドを一般信徒が選ぶ方法は次の通りである^{注50}。

- ①自ら確信する。ただしこの場合は自らが有識者である必要がある。
- ②二人の有識にして公正な人物が認めるモジュタヒドをタグリードの対象とする。ただし他の二人の有識にして公正なる人物がそのモジュタヒドに反対しないこと。
- ③三人以上の有識者が認めるモジュタヒドをタグリードの対象とする。

最も有識なモジュタヒドを探している間、一般信徒（モガッレド）はエフティヤートに基づき行動しなければならない。これはエフティヤートに近いモジュタヒドのファトヴァに従うことで十分である。

最も有識なモジュタヒドが見いだせない場合は、次の三つのケースになる。

- ①あるモジュタヒドが最も有識であることに確信が持てず、より有識なモジュタヒドが他にいると思われる場合は、義務としてのエフティヤートによって彼にタグリードする。
- ②二人のモジュタヒドの内、いずれが有識か確信が持てない場合は、推測でより有識と思われるものにタグリードする。
- ③複数のモジュタヒドが同等であると見られるとき、その一人にタグリードする。

4. マルジャエ・タグリードの変更^{注51}

全てのシャリーア問題でマルジャエ・タグリードを乗り換える人はオドゥール（'odul）と呼ぶ。

オドゥールが義務（vajeb）となるのは次のような場合である。

- ①後になってそのマルジャエ・タグリードが最も有識でなく、また、公正でないことが判明した場合。
- ②例えば老人惚けでマルジャエ・タグリードがその資格を満たさなくなったとき。
オドゥールが許容されるのは次のような場合である。
- ①存命中のマルジャエ・タグリードから同等のマルジャエ・タグリードにオドゥールすることができ。
- ②他界したマルジャエ・タグリードにタグリードすることは原則としてできないが、存命中のモジュタヒドのファトヴァによって可能となる。そして、一部のシャリーア問題で、あるモジュタヒドにタグリードし、その死後に全ての問題でタグリードすることができる。
オドゥールが許可されない場合は次のような場合である。
- ①マルジャエ・タグリードが、より有識であるか、同等である場合以外はオドゥールは禁じられる。
- ②最有識のモジュタヒドにタグリードすることは義務であるが、もし、最有識のモジュタヒドが最有識のモジュタヒドからタグリードすることを義務とするファトヴァを出せば、他のマルジャエ・タグリードからタグリードすることは禁じられる。

5. 部分的タグリード

一部のシャリーア問題で他のマルジャエ・タグリードにタグリードするものをロジューと呼ぶ。

ロジューが認められるのは主として次の場合である^{注52}。

- ①火急的狀況で自分のマルジャエ・タグリードにホクムを求める時間的余裕が無い場合、自

分のマルジャエ・タグリードに次いで有識なマルジャエ・タグリードにタグリードすることができる。

- ②同等のマルジャエ・タグリードの場合は、問題に応じてロジューする事ができる。
- ③有識度が劣るマルジャエ・タグリードと最有識のマルジャエ・タグリードのファトヴァが一致する場合、あるいは劣るマルジャエ・タグリードのファトヴァに最有識のマルジャエ・タグリードが反対しない場合も、劣るマルジャエ・タグリードにタグリードする事ができる。
- ④自分のマルジャエ・タグリードがファトヴァを出さない場合、他のマルジャエ・タグリードにロジューできる。

一方、ロジューが認められないのは次の場合である。

- ①^{注53}ある問題で、モガッレドが一人のマルジャエ・タグリードのファトヴァに基づいて行為し、そのマルジャエ・タグリードが他界した後、その問題で存命中の別のマルジャエ・タグリードのファトヴァに従った場合、再度その問題で他界したマルジャエ・タグリードのファトヴァに沿うことはできない。

以上これらの細則から指摘しうることは、原則として死去したマルジャエ・タグリードにタグリードすることはできないものの、存命中のマルジャエ・タグリードのファトヴァでもって死者にタグリードをし続けることが可能であること、また、その場合、さらに第二番目のマルジャエ・タグリードが死去した場合、第三番目のマルジャエ・タグリードが死者へのタグリードを義務(vajeb)としている場合に、第一番目のマルジャエ・タグリードへのタグリードを継続することが許容(jayez)される点である。

従って、ホメイニー師死去後も M.A.アラーキー師のファトヴァによって故ホメイニー師にタグリードを続けてきたモガッレドは、M.A.アラーキー師死去後も故ホメイニー師にタグリードを継続するには死者へのタグリードを義務とするマルジャエ・タグリードの存在が必要となる。M.A.アラーキー師死去に際して「テヘランの戦うウラマー協会」がハーメネイ師を含む3名をマルジャエ・タグリードとして一般信徒に紹介し、かつこの3名は故ホメイニー師にタグリードを継続し続けることを許容しているとの声明をだした。少なくとも上記細則に基づけば、信徒が M.A.アラーキー師をはさんで故ホメイニー師にタグリードを続けるには M.A.アラーキー師に続く彼ら第三番目のマルジャエ・タグリード達が死者へのタグリードを義務とする見解を持つ必要がある。残念ながらこの3名が死者へのタグリードを義務とする内容のファトヴァを発出したか否か確認することはできない^{注54}。ただし、この三名ではなく、その直後に「コム講師協会」がロジューの対象として紹介したこの三名を含む七名のマルジャエ・タグリードの一人：S.N.モカーレム・シーラーズ師のレサーレでは次の形で死者へのタグリードを義務としていることを確認できる。即ち、生前からのモガッレドが死者にタグリードすることは許容(jayez)であるのみならず、もしその死者が最有識であった場合、彼からファトヴァを得ていたことを条件にタグリードの継続は義務(vajeb)となる^{注55}と。

しかしながら、もう一つ指摘しうる点は上記細則からすればイスラーム法上で新たに成年に達し、もって義務能力者となったものは死者にタグリードすることが禁じられ、存命中のマルジャエ・タグリードにタグリードしなければならないということである。義務能力者の条件は15歳以上(女性は9歳)^{注56}である。つまり、彼らは故ホメイニー師へのタグリードは禁じられ、

別の存命中のマルジャエ・タグリードを選ぶことが強いられることになる。

イランの人口構成比はピラミッド状をなしており、若年層ほどその人口は多くなっている。因みに1991年時点の総人口5584万人^{注57}中、15～19歳が約591万人、10～14歳の層は約755万人、5～9歳の層は904万人、0～5歳は814万人であった。ホメイニー師が亡くなったのが1989年6月であり、当統計年次は1991年であることから1997年6月時点での概算で約1400万人ほどがホメイニー師死去後に新たに義務能力者の年代に参入したと見ることができる。この人口は1997年夏時点で総人口の約4分の1にあたり、今後この比率は加速的に増加する。現指導部はホメイニー師死去後、故ホメイニー師への *baqa'* によってその急場をしのいできたが、その効力は時間の経過とともに失われつつあると見られる。

VI. 理論的側面

次に紹介するのはコム・イスラーム教宣事務所の機関誌「ハウゼ (Houzeh)^{注58}」に掲載された二つの論考の要旨である。最初に取り上げる「マルジャエ・タグリード制と指導者^{注59}」はM.A.アラーキー師が亡くなったときに、新聞紙上^{注60}に転載される形で一般信徒に幅広く紹介されたものであり、その意味において現指導部の公的認知度が高いと見られるものである。

「イスラーム体制の樹立は宗教的義務 (vajeb) であり、これは代替可能な義務 (vajebe Kafai) に類し、もし一人の公正な法学者がその樹立に成功すれば、他のものはその義務を果たす必要はなくなる。同時に、彼に従うことが義務となる。また、ヴァリーイエ・ファギーフは一人でなければならない^{注61}。従って、一人の公正な法学者がイスラーム体制を樹立するか、あるいは人々が一人の法学者を (間接的であれ) 選び出せば、この法学者のホクムは全ての分野に貫徹する。これは大半の法学者が受け入れていることである。

ヴァリーイエ・ファギーフとマルジャエ・タグリードの間で見解の相違が生じる場合、それが統治体制と関連がある場合には、マルジャエ・タグリードもそのモガッレドもヴァリーイエ・ファギーフに服従する。そうしないことは禁止された行為 (ハラーム) となる。つまり、統治府令にマルジャエ・タグリードもそのモガッレドも従う義務がある。

信仰と宗派の根幹 (zaruri)、オスレー・ディーニヤイスラーム法の基礎においては、法学者の間で見解の相違が生じることはない。普通、見解の相違が生じるのはイスラーム法の細部 (分岐的規範 *foru'-e din*) であり、しかもその一部においてである。例えば卵の中に血があった場合どうするかとか、旅行中の祈りの短縮をどうするかといった問題であり、体制や統治の問題に関係の無い範囲である。これらの問題で見解の相違があったとしても差し支えはない。つまり、個人的問題、宗教儀礼 (*'ibadat*) 的問題で統治と摩擦がない分野では人々は自由にマルジャエ・タグリードを選んでタグリードできる。

しかし、政治社会や立法の分野において、例えば、「農地」、「銀行法」、「労働法」、「借家」、「税法」、「協同組合」、「外交関係」、「対外借款」、「道路建設による家屋の立ち退き」などの問題で見解の相違があった場合は問題が生じる。

ヴァリーイエ・ファギーフは他の法学者が答えていない問題、あるいは体制・統治と調和しない見解を表明している場合、判官 (*qaji*) を任免できるように代理を任免し、ファトヴァを発出し、あるいは公共の福利 (マスラハ) のある、他の法学者のファトヴァを選び確定することによって、人々を混乱と分裂から統一と調和に導くことができる。因みにヴァリーイエ・ファ

ギーフは政治社会問題でファトヴァを出す条件を備えておれば出し、かかる条件を備えていない、あるいは備えていても判別できない場合には、別の法学者のファトヴァに署名して実行させる。

もし、複数のマルジャエ・タグリードがあり、それぞれが一つの分野で最有識であり、一方で公正な法学者が社会を管理指導し、他者よりも政治社会、新しい問題のイスラーム法照合において、より通曉しておれば問題は起こらない。というのも、人々は個人的問題、また政治と摩擦がない社会的アフカームにおいて各自のマルジャエ・タグリードにタグリードし、統治に直接結びつく政治社会問題ではヴァリーイエ・ファギーフにタグリードするからである。これを「タグリードにおける区別」(taba'iz dar taqrid)とよび、全ての法学者はこれを問題なしとし、一部では義務とすらしている」。

要旨をまとめるに、一般信徒は自由にマルジャエ・タグリードを選びタグリードすることができるが、統治に関わる分野ではマルジャエ・タグリードも、それにタグリードする一般信徒もヴァリーイエ・ファギーフに従うことが義務であるとし、ヴァリーイエ・ファギーフがファトヴァを出す条件を持っていない場合には別の法学者のファトヴァを選び、署名・確定する事で自らのファトヴァに代えることができるというものである。

さらに、ホウゼ同号には「ホクムとファトヴァの地位と領域^{注62}」と称する論考で、次のような論も展開されている。

「ファトヴァは法見解であり、ホクムは命令である。マルジャエ・タグリードのファトヴァは彼に従うモガッレドのみを拘束し、別のマルジャエ・タグリードは異なったファトヴァを出しうる。しかし、ハーケム（ヴァリーイエ・ファギーフ）の出すホクムは貫徹する。従ってホクムに反対意見を述べることは体制秩序に混乱をもたらす故に不可である。このため、マルジャエ・タグリードは複数存在し得るが、ハーケムは一人でなければならない。しかし、ハーケムもマルジャエ・タグリードもムフティの資格を持たなければならないことは同じである。

イスラーム法の諸法を実施する環境をつくるがためにハーケムが出すホクムは統治府令(Ahkam-e Hokumati)であり、同様に第一次規範、第二次規範といった国家運営に関係するイスラーム諸法の問題点（モーズー）の判別もまた、ハーケム（ヴァリーイエ・ファギーフ）の手中にある。ハーケムはマスラハ（公共の福利、利益）を判別し、ホクムを出す。例えば、交通規則における禁則や、輸出輸入の禁則などもその範疇であり、これは、モバーフ（mobah：5範疇の内の自由裁量の行為）の範囲に属するが、たとえマスラハに基づく統治府令(Ahkam-e Hokumati)がイスラーム法と相対立する場合でも、例えば、公益上、巡礼(hajj)を中止することが求められる場合や私有権の制限・接収が求められる場合にも、ハーケムは最も重要なホクムを選び、それに次ぐホクムの停止を宣言する。これは理性的行為であり、また、イスラーム法の確認するところでもあり、預言者や第1代イマーム・アリーの統治にも事例を多く見いだしうるものである。

ただし、統治府令(Ahkam-e Hokumati)はイスラーム法を増減するものではない。それはマスラハの上に存在するものであり、マスラハは社会の変遷に伴って変化する。タバコ・ボイコットのホクムもイスラーム法の制定ではなく、ホメイニー師の見解に寄れば、第二次規範としてだされたものであった。ただし、統治府令(Ahkam-e Hokumati)自体は第一次規範である。他

のマルジャエ・タグリードのファトヴァはそれが個人の行為や生活の範囲内で実行可能であるが、社会経済問題の解決のための見解ではハーケムのファトヴァとホクムが実行されなければならない。さもなくば社会は分解する」。

以上紹介した二つの論考の内、後者は、最初に紹介した論よりもヴァリーイエ・ファギーフの権限をより強くかつ明確に打ち出している点が指摘しうる。最初の理論ではヴァリーイエ・ファギーフがマスラハに基づいてファトヴァを出す権限を備えておれば自らがだし、備えていなければ、他人のファトヴァを選び追認するとし、イスラーム法と抵触する分野の彼の権限に関しては不鮮明である。しかし、後者ではたとえそれがイスラーム法と抵触する分野でも、統治府令 (Ahkam-e Hokumati) として発出することが可能である旨を明示している。

しかし、かかる差違があるものの、いずれの論にしても、ヴァリーイエ・ファギーフが法学者であることを前提に、従来の宗教権威マルジャエ・タグリードの存在を認めつつも、その権限に新たな制限を課し、統治体制に関わる、政治社会分野でのヴァリーイエ・ファギーフ（あるいはハーケム）の優位性を主張していることが指摘し得る。

こうした理論に対してハーメネイ師をマルジャエ・タグリードに推し、従来のマルジャエ・タグリードの条件より時代への通暁が優先すると説く司法府長官モハンマド・ヤズディ師は次のように反対の立場を述べる。「多くの人々は問題を分けるべきであると説くが政治問題とそれ以外の問題を訊くマルジャエ・タグリードを分けるのは100%誤りである。イジュテハードは分けることができない。仮に分けうるとしても政治問題は政治に詳しい法学者に尋ね、宗教儀礼問題は他の法学者に尋ねるということは宗教を政治から分離することになる。政治に詳しい法学者も非政治面での法学者もファトヴァを出すにおいて違いはない。ファトヴァはホクムの一部であり、指導者はファトヴァに基づきホクムを出すのである」^{注63}。

V. 結語に代えて

現体制内において、最高指導者と宗教権威の関係につき大きく二つの立場を見ることができ。一つはマルジャエ・タグリードの資格そのものを見直そうとするものであり、あわせて最高指導者をマルジャエ・タグリードとして、その一致を追求する立場である。この立場として、先述のモハンマド・ヤズディ師の見解があり、また憲法擁護評議会のジャンナティ師がM.A. アラーキー師が亡くなったとき、金曜礼拝の場で述べた次の見解もその例として挙げられる。

「しばらく前までは単に知識と敬虔さがマルジャエ・タグリードを決定するための条件であったが、イスラーム運動、特にホメイニー師の活動開始後は、現在の政治社会に関する完全な知識がマルジャエ・タグリードを選定する上で特に重要な条件として配慮されなければならない」^{注64}。

一方、もう一つの立場として、従来からのマルジャエ・タグリードの存続を認めつつ、彼らの権限を制限し、最高指導者をヴァリーイエ・ファギーフとしてその権限をマルジャエ・タグリードの上位に位置づけようとする立場がある。例えば、上述のハウゼの二論考はこの立場に立つものである。

前者の立場である政治社会問題への通暁を新たにマルジャエ・タグリードの資格条件に加えるという立場は、従来からのマルジャエ・タグリードの否定とそれに従うモガッレドの信仰生

活の混乱という事態をもたらしかねない。これに対して、これまでの信仰生活のあり方への衝撃を緩和しつつ現体制指導者の権威を従来の宗教権威の上位に位置づけようとしているのが後者の立場であると言えよう。また、M.A.アラーキー師死去時にハーメネイ師を含む連立のマルジャエ・タグリードを推薦したのはこの両者の立場をすり寄せさせた妥協の産物と位置づけてみることもできる。程度の差こそあれ、いずれの立場も宗教制度に変化を求めるという点に於いては両者の立場に変わりはない。

かかる宗教制度変革への潜在的力は、故ホメイニー師へのタグリードの継続を認める宗教的細則の側面における従来からの baqa' の制度、即ち、死者へのタグリード制度を活用することによって緩和されてきた。もっとも、この baqa' の制度は義務能力者に若い新世代が参入することによって、時間の経過とともにその効力は色あせつつあると見られる。勿論、官選のマルジャエ・タグリード達が故ホメイニー師の法見解と同じファトヴァを発出することはできる。しかし、かかるマルジャエ・タグリードを選ぶかどうかの選択権は伝統的に一般信徒側にある。

故ホメイニー師の baqa' の効力が失われることは、とりもなおさず、最高指導者ハーメネイ師がヴァリーエ・ファギーフとして、あるいは新規の資格によるマルジャエ・タグリードとして、その優位性を宗教界に確立する必要性が強まることであり、これは別面、それに抵抗する宗教界やマルジャエ・タグリードに対して、国家権力を行使した実効支配確立の必要性を意味する。

1997年に入り、大統領職を満期終了したラフサンジャーニー師を議長にマスラハ（社会公益）判別会議の強化・拡充の動きが生じた半面、時を同じくして宗教界内部の軋轢の強まりを示唆するアムネスティ・インタナショナルの報告書が出されたことは、かかる状況を反映したものと見ることができよう。ヴェラーヤテ・ファギーフ体制はその樹立時に依拠した宗教制度それ自体との矛盾に逢着しこれを如何に克服するか、試練の途上にあると言える。

付 表

ハーメネイ師を「単一のマルジャエ・タグリード」に推す国外の人たち

カシミール： H.Aqa Seyyed Mostafa Mosavi (カシミール・シャリーア協会長), H. Sheikh Gholamhoseini
(カシミール信徒党団体)

レバノン： Seyyed Hasan Nasrolah (レバノン・ヘズボッラー指導者)

Kerkil： H.Sheikh Hosein Zakeri

ハーメネイ師のマルジャを支持する国外のシーア派組織

- | | | |
|---|----------------|---|
| 1 | パキスタン | クエッタ・イマーム・サーデグ協会 |
| 2 | カシミール | カシミール・モジャーヘディーン傘下の Al Mo'menin 党 |
| 3 | ナヒジュヴァン | ナヒジュヴァン自治共和党 |
| 4 | アーゼルバーイジャーニ共和国 | バーケー長老新モスク礼拝者たち |
| 5 | アーゼルバーイジャーニ共和国 | アーゼルバーイジャーニイスラーム党ならびにアーゼルバーイジャーニ在住アフガン人 |
| 6 | イラク | A.Seyyed Mohammad Baqer Hakim 及び A.Seyyed Mahmud Hashemi
(イラク・イスラーム革命評議会議長ならびに責任者) |

ヴェラーヤテ・ファギーフ体制とマルジャエ・タグリード制度

国外からハーメネイ師に書簡を送りマルジャエ・タグリードを引き受けるよう要請した人

- 1 シリア
Seyyed Ahmad Fahri, Mohammad Bayani, Nasrollah Qorban 'Ali Sarabi, 'Abdol alTaif al Khafaji, Seyyed Mir Hosein Sharifi, Khodayar Naseri, Qasem Seyyed Bih Asilasleiman, Yahia Kilobali, Ebrahim 'Osman Bandi, Eshaq al Fa'Aziz, Sisiva Bubkar Kita
- 2 バングラディシュ Seyyed Mohammad Taqi Shahrakhi
- 3 レバノン
Sheikh 'Ali 'Afi, Hosein Mosavi (Abuhasham) ,Seyyed Mortaza 'Askari, Mohammad Ebrahim Ansari, Sabhi Tafaili, Mohammad Baqer Fazlollah, Khaled al 'Atih, Mohammad Mehdi Taskhiri
- 4 インド
Seyyed Jamaludin Dinparvar, Seyyed Mohammad 'Asgeri, Seyyed 'Aghil al Ghorvi
- 5 バングラディシュ Seyyed Rashid Hoseini Zeidi
- 6 南アフリカ Seyyed Oftab Heidar Razvi
- 7 オーストラリア Sheikh Mansur Laqai
- 8 トルコ
Qadir Ekaras, Boland Sadqi, Abulfazl Sun, Atman Kuch, Mohammad Qayemi
- 9 米国
Seyyed Talmiz Hoseini, Seyyed Modsar 'Alishah, 'Asefi, Seyyed Rafiq Naqavi , Nakhvat Hoseini, Seyyed Sar-taji Zeidi, Amir Mokhtar Rafiqi, Seyyed Fazel Hoseini Mosavi, Va'ezzadeh
- 10 パキスタン
Mosatafa Ja'fari, Seyyed Shafqat Shirazi, Seyyed Ja'far Hosein Nagavi, Mohsen Reza Naqavi, Gholam 'Abbas Naqavi, Gholam Mostafa Ja'fari, Ma'alZil Hosein 'Olvi, Ghosur 'Abbas, Seyyed Hosein Mortaza Naqavi, Jom'e Asadi
- 11 モリタニア Masrur al Hosein
- 12 カシミール Seyyed Hosein Mosavi
- 13 カナダ
Seyyed Mohammad Reza Hejazi, Seyyed Reza Hoseini Nasab, Seyyed Zaki Baqeri, Mohammad Naser Biria
- 14 アラブ首長国連邦 Akbarian
- 15 スーダーン Mohammad Seyyed Namai
- 16 ドイツ Sabahaldin Torki Iilmaz
- 60 ブラジル Seyyed Nouraldin Ashkvari
- 61 南アフリカ Mohammad Sha'b Boli, Yusef Malek Linda
- 63 スウェーデン Hasan Roushandel

ハーメネイ師を「単一のマルジャエ・タグリード」に推すイラン国内の人たち

A.Mohammad Yazdi (司法府長官), A.Hosein Rasti Kashani, A.Mohammad Ebrahim Jannati, A.Seyyed 'Ab-bas Khatamyazdi, A. Ahmad Mohseni Gorgani, A. 'Abdolraji Mosavi Jazayeri, A. 'Abdolhosein Ghorvitabrizi, A. Seyyed Ja'far Karimi, A. Mortaza Banifazl, A. Saberi Hamdani, A. Seyyed 'Ali Akbar Qoreishi, A. Hadi Rouhani, A. Mohammad 'Ali Taskhiri, A. Ahmad Jannati, A. Seyyed Mahmoud Hashemi, A. Reza Ostadi, H. Seyyed Mohammad Razvi

ハーメネイ師をマルジャエ・タグリードとして信徒にロジュー (roju') を認めた人 (エスファハーン、
ゴム、マシュハドのウラマー達が書簡で彼らの見解を問い合わせに答えた形で)。

- 1 イラン A.Ma'asumi
- 2 イラン A.Seyyed Saber Jabari

富 田 健 次

- | | | |
|---|-----|--------------------------|
| 3 | イラン | A.Seyyed Isma'il Hashemi |
| 4 | イラン | H. 'Abbas 'Ali Ekhtari |
| 5 | イラン | H.Fazel Ferdousi |

ハーメネイ師をシーア派マルジャエ・タグリードとして紹介した人

- | | | |
|---|-----|----------------------------------|
| 1 | イラン | A. Mirza Ja'far Eshraqi |
| 2 | イラン | A.Mirza 'Ali Qazlji |
| 3 | イラン | A. Seyyed Mohmmad Taqi Al Hashem |
| 4 | イラン | A.Gholarm reza Hoseini |

ハーメネイ師をマルジャエ・タグリードとして信徒にタグリードの許可を出した者

- | | | |
|----|-----|--|
| 1 | イラン | A.Seyyed Jalalaldin Taheri エスファハーン金曜礼拝導師 |
| 2 | イラン | A.Seyyed Mehdi 'Abadi マシュハド金曜礼拝導師 |
| 3 | イラン | A.Sheikh Mohsen 'Araqi デズフル金曜礼拝導師 |
| 4 | イラン | A. 'Ali Asghar Ma'asumi トルボトヘイダリ金曜礼拝導師/専門家会議議員 |
| 5 | イラン | A. Seyyed 'Ali Akbar Qoreishi 専門家会議議員 |
| 6 | イラン | A. Reza Ostadi コム マドラセ |
| 7 | イラン | A. Saber Jabari コム マドラセ |
| 8 | イラン | H. Mohammad Va'ez Khorasani 世界イスラーム諸派友好会理事 |
| 9 | イラン | H. 'Abbas'ali Ekhtari セムナーン金曜礼拝導師 |
| 10 | イラン | Ebrahim Fazel Ferdousi ブーシェフル金曜礼拝導師 |
| 11 | イラン | Mosavi ハメダーン金曜礼拝導師 |
| 12 | イラン | Mohammad Hashmian ラフサンジャーン金曜礼拝導師 |
| 13 | イラン | Fazel Harandi コム マドラセ |
| 14 | イラン | Mehmannavaz ボジヌルド金曜礼拝導師 |
| 15 | イラン | Seyyed Yahiya Ja'farian ケルマーン金曜礼拝導師 |

信徒にハーメネイ師をタグリードすることが可能との声明を出した者

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | イラン | Seyyed Kamal Faqih Imani |
| 2 | イラン | Haj Sheikh 'Ali Mohammad Ejei エスファハーンのウラマー |
| 3 | イラン | Qorvian ニーシャーブール金曜礼拝導師 |
| 4 | イラン | Seyyed Morteza Esfahani ガーインの金曜礼拝導師 |
| 5 | イラン | マーゼンダラーン州のウラマー達ならびに諸金曜礼拝導師 |

信徒にハーメネイ師にタグリードすることを許可 (jayeز) もしくは確定とした者

- | | | |
|----|-----|---|
| 1 | イラン | Kazem Nourmofidi ゴルガーン金曜礼拝導師 |
| 2 | イラン | Va'ez Tabasi イマーム・レザー廟管理人 |
| 3 | イラン | Hadi Barikbin ガズヴィーン金曜礼拝導師 |
| 4 | イラン | Gholamreza Hoseini オルミーエ金曜礼拝導師 |
| 5 | イラン | 'Ali Asghar Shafi'i チャーボクサル金曜礼拝導師 |
| 6 | イラン | Rabani バンドルギャズ金曜礼拝導師 |
| 7 | イラン | Mohammad Reza Mohami |
| 8 | イラン | Sheikh Najafi Khonsari |
| 9 | イラン | 'Abbas'ali Soleimani バーボルサル金曜礼拝導師 |
| 10 | イラン | Mohammad Hosein Zarandi ケルマーンシャー金曜礼拝導師 |
| 11 | イラン | Haj Seyyed 'Ali Shafi'i クーゼスターン代表専門家会議員 |

- 12 イラン Qorbani ラーヒージャン金曜礼拝導師
- 13 イラン Seyyed Esma'il Musavi Zanjani ザンジャーニ金曜礼拝導師
- 14 イラン MohammadReza Adinehvand Lorestani

ハーメネイ師をマルジャエ・タグリードの一人とするテヘランの闘うウラマー協会ならびにコム・マドラセ講師協会の声明を歓迎した組織・機関

- 1 イスラーム教宣庁長官 H.Mohammadi 'Araqi
- 2 在米・カナダ大学生イスラム教会
- 3 コムイスラーム教宣事務所婦人部
- 4 教師イスラーム協会連合
- 5 医学部イスラーム協会
- 6 タブリーズの闘うウラマー協会
- 7 タブリーズの諸階層市民
- 8 フィリッピン人のイラン人大学院イスラーム協会
- 9 シリアレバノンの諸宗派学マドラセメンバー

(A. 及び H. はそれぞれアーヤトッラー、ホッジャトル・イスラームを意味する。出所： Kayhane Havai, Dec. 7 & 14, 1994 より作成。)

〔注〕

- 注 1 Kayhane Havai, Jun. 21, 1989, p-3 .
- 注 2 拙著『アーヤトッラー達のイランーイスラーム統治体制の矛盾と展開』、第三書館、1993年、P-276参照。
- 注 3 例えばドイツ在住の Mehdi Hayeri は M. A. アラーキー師について、次のように述べている。「かつて優れた教授であったが、この30年ほど視力聴覚が衰えて、自宅で隠遁生活を行っていた。かつて優れた教授であったとはいえ、マルジェ・タグリードではなかった。彼は自分がマルジャエ・タグリードになったことを全く知らなかった。」 Kayhane Havai, Dec 21, 1994, p-23.
- 注 4 Maziar Behrooz はその論 The Islamic State and the Crisis of Marja'iyat in Iran でイラン指導部がゴルパーイガーニ師を単一のマルジャエ・タグリードとして位置づけようとしたとの見解をとっている。Maziar Behrooz, "The Islamic State and the Crisis of Marja in Iran", The Echo of Iran NO.110, July, 1997, p-32. しかし、司法府長官モハンマド・ヤズディ師はゴルパーイガーニ師の死去に際しての金曜礼拝の場で次のように述べており、ゴルパーイガーニ師をイラン指導部が単一のマルジャエ・タグリードに位置づけようとしたと言う見解は否定される。「アブッルーカーセム・ホーイ師が逝去したとき宗教界はゴルパーイガーニ師と M. A. アラーキー師の二人のマルジャエ・タグリードにタグリードできると説明した。ゴルパーイガーニ師が亡くなるとアラーキー師にタグリードできる、或いはすべきと説明した。・・・」 Kayhane Havai, Dec. 22, 1993, p-9.
- 注 5 コム講師協会は1993年12月11日、ゴルパーイガーニ師の死去を受けて、ゴルパーイガーニ師亡き後のマルジャエ・タグリードは M. A. アラーキー師に断定されるとし、その前文でかつてアブッルーカーセム・ホーイ師が死去したときの声明と同様にとしている。 Kayhane Havai, Dec. 15, 1993, p-5.
- 注 6 Maziar Behrooz, "The Islamic State and"
- 注 7 The Echo of Iran, Number 74, 1994, p-21.
- 注 8 The Echo of Iran, Number 70, 1993, p-17.
- 注 9 Kayhane Havai, Dec. 22, 1993, p-9.

- 注10 この時、ハーメネイ師を支持したコム・ウラマー要人として、Yousef Sanei, Fazell Lankarnani, Amoli, Ebrahim, Azeri Qomi がいた。従ってこの反駁文書はモンタゼリー師支持者によると観測された。The Echo of Iran, Number 74, 1994, p-21.
- 注11 ゴルパーイガーニーの葬儀は1993年12月、婿が導師を勤めることによって行われた。Kayhane Havai, Dec. 15, 1993. p-2.
- 注12 1993年12月27日、The Echo of Iran, Number 70, 1993, p-17.
- 注13 Anoushiravan Ehteshami, After Khomeini-The Iranian Second Republic, London, Routledge, 1995, p-53. ここでA. Ehtestfami は単に Ayatollah Shirazi とのみ記しているが、問いあわせたところ、Sheikh Nasser Mokarem Shirazi を指しているとのことである。因みにイラン指導部から弾圧を受け、Amnesty International によって取り上げられたウラマーにシーラーギー師 (Grand Ayatollah Sayed Mohammad Shirazi) がいるが別人である。Amnesty International, IRAN:SHI'A RELIGIOUS LEADERS AS VICTIMS OF HUMAN RIGHTS VIOLATIONS, Amnesty International News Release, News Service:87/97, AIINDEX:MDE 13/24/97, EMBAGOED FOR 0001 WEDNESDAY 3 JUNE 1997, 参照。
- 注14 Anoushiravan Ehteshami, After Khomeini- . . ., pp -53~54
- 注15 Iran Times, Vol. xxiv, no. 39 Dec, 9, 1994, p-7
- 注16 Iran Times, Vol. xxiv, no. 39 Dec, 9, 1994, p-11では Baqer Al Hakim はハーメネイ師支持を表明したと伝えている。ここでは Maziar Behrooz の見解に従った。
- 注17 Iran Times, Vol. xxiv, no. 39 Dec. 9, 1994, p-7
- 注18 マルジャエ・タグリードの葬儀で誰が導師を勤めるかが、そのマルジャエ・タグリードの後継者として重要な意味を持つ。ホメイニー師の葬儀はゴルパーイガーニー師が導師を勤め、M. A. アラーキー師の葬儀はモハンマド・タギー・バフジャト師 (Mohammad Taqi Bahijat) が勤めた。Kayhane Havai, Jun. 14, 1989, p-29 & Iran Times, Vol. xxiv, no. 39 Dec. 9, 1994, p-7
- 注19 Amnesty International, IRAN:SHI'A RELIGIOUS LEADERS AS VICTIMS . . .
- 注20 Shahrough Akhavi, "Contending Discourses in Shi'i Law on the Doctrine of Wilayat al-Faqih", Iranian Studies, Vol.29, Numbers 3-4, Summer/Fall 1996. pp-253~259.
- 注21 Iran Times, Vol. xxiv, no. 39 Dec. 9, 1994, p-15.
- 注22 テヘランの戦うウラマー協会はM. A. アラーキー師が亡くなる直前、コム講師協会のリストからハーメネイ師を除いた6名を候補者として挙げていた。Iran Times, Vol. xxiv, no. 39 Dec.9, 1994, p-1
- 注23 Kayhane Havai, Dec. 7, 1994 p-2.
- 注24 Kayhane Havai, Dec. 7. 1994 ibid
- 注25 Iran Times, Vol. xxiv, no. 39 Dec. 1994, p-11.
- 注26 The Echo of Iran, Number 80, 1994. p-19.
- 注27 前記モハンマド・ルーハーニー師の母方のおばの子に当たるが (Kayhane Havai, Dec. 14, 1994, p-15.)、メシュキーニー師がゴルパーイガーニー師死去時にハーメネイ師を単独のマルジャエ・タグリードにするよう呼びかけたとき、これを支持していた (The Echo of Iran, Number 74, 1994, p-21.)
- 注28 コム・マドラセ最高評議会議長。The Echo of Iran, Number 74, 1994.
- 注29 Kayhane Havai, Dec. 7, 1994 p-2/9. またエスファハーン、コム、マシュハドのマドラセのウラマー達がハーメネイ師に roju` (部分的にその法見解に従うこと) する事に関して Ayat Ma'sumi などハーメネイ師をマルジャヤトの資格ありとするウラマーに見解を求めたとされる。
- 注30 Kayhane Havai, Dec. 28, 1994, p-29. また、この数カ月後にはハーメネイ師をマルジャエ・タグリードすることは結局失敗に終わったとも伝えられた。The Echo of Iran, Number84, 1995, Mar. P-14.
- 注31 彼らはモンタゼリー師のマルジャエ・タグリードを支持する書簡を刊行したことが1995年1月27日号の Iran Times で報じられたと伝えられる。Maziar Behrooz, "The Islamic State and . . .", p-32. また、レバノンのラジオ放送はコム・ウラマーがM. A. アラーキー師の後のマルジャエ・タグリードはモンタゼリー師であると述べたと報じたが、コム・宗教学徒がこれを否定したと Kayhan Havai, 1994, 12月7日号、第2面が伝えた。それによるとモンタゼリー師がマルジャエ・タグリード

として確認したウラマーとして、1. Mohammadi Gilani, 2. Musavi Ardebili, 3. Momen, 4. Mohdavi Kani, 5. Mosavi Zanjani, 6. Mohaqqaq Damad, 7. Garami, 8. `Abai Khorasani, 9. Tavassoli, 10. Ebta-hi Kashani, 11. Taheri Khoramabadi, 12. Mahfuzi, 13. Shamas Golpaigani, 14. Khalkhali の名が挙げられたが、彼らはこれを否定したとされる。BBC 放送はモンタゼリー師の子息の一人 Ahmad の情報として上記レバノンのラジオと同様の報道を行った。ハーメネイ師をマルジャエ・タグリードに数えることに反対しているのは伝統主義者とイスラーム左派であるとも伝えられた。Iran Times, Vol. xxiv, no.39 Dec.9,1994, p-14.

注32 The Echo of Iran, Number 73, 1994, p-13.

注33 The Echo of Iran, Number 79, 1994, p-18 & Number81, 1994, p-20.

注34 Kayhane Havai Jan. 4, 1995, p-4, Jan. 18, 1995p-4 & p-9.

注35 The Echo of Iran, Number 84, 1994, p-14.

注36 Amnesty International, IRAN:SHI'A RELIGIOUS LEADERS AS VICTIMS . . .

注37 `Abdolrahim Mogahi, Resaleye nemune-Ahkame taqrid va ejtehad-Motabeq ba fatva va nazariyate hazrate Ayatolla al'azemi Emam Khomeini, Markaze Entesharate Daftare Tablighate Eslamiye Houzeye Olmīe Qom, 1371 (1992年) 秋。

注38 ただし、mouz'at の内、祈り (namaz)、断食 (ruze)、巡礼 (hajj) などその mouz'at がシャリーアのそれである場合と慣習法 ('orfi) の mouz'at の場合で、慣習によってその意味に見解の相違がある場合、タグリードが義務となる。`Abdolrahim Mogahi, Resaleye nemune-Ahkame taqrid va ejtehad . . . p-98.

注39 アフカームとは「全ての側面にわたるイスラームの分岐点規範 (foru'-e din) であり、行為の命令全てである。`Abdolrahim Mogahi, Resaleye nemune-Ahkame taqrid va ejtehad . . . , p-21.

注40 ①賦課のアフカーム (ahkam-e taklifi)。これは、人間にある行為をすること、或いはしないことを義務として賦課していること、およびするかしないかの選択を人間にゆだねることを含んでいる。この名称は人間にある行為を要求したり、或いは禁止したりする事例が圧倒的に多いことからでている。

②説明的アフカーム (ahkam-e vaz'e'i)。これらの目的は義務賦課でも選択でもなく、ただ、あれが、この結果の原因であるとの説明、あれがこの条件つけられたものの条件であるとの説明、あるいはあれがこの判断の障害であるとの説明である。アブドル=ワッハブ・ハッラーフ著／中村廣治郎訳『イスラームの法源と理論』、東京大学出版会、1984年、133-138頁参照。

注41 因みにアブドル=ワッハブ・ハッラーフは上記著で賦課の判断は①義務 (ijab)、②推奨 (nadb)、③禁止 (tahrim)、④避忌 (karahah)、⑤許容 (ibahah) であり、その対象となる行為はそれぞれ、①義務行為 (wajib)、②推奨行為 (mandub)、③禁止行為 (muharram)、④避忌行為 (makruh)、⑤許容行為 (mubah)。アブドル=ワッハブ・ハッラーフ著、同上書138頁参照。

注42 この義務はさらに二つに分けられる。一つは意図 (niyat) を伴わなければならない儀礼的行為 (ebadat)、例えば祈りや断食と、意図を伴わない非儀礼的行為で、例えば祈りの前の体や衣服の浄化である。`Abdolrahim Mogahi, Resalye nemune-Ahkame taqrid va ejtehad . . . , p-31.

注43 `Abdolrahim Mogahi, Resaleye nemune-Ahkame taqrid va ejtehad . . . , p-104.

注44 青年すなわち mokallaf は次の3の条件のどれかを満たすことである。①イスラーム暦上、満15歳、女性は満9歳以上。②陰部から腹部にかけて体毛が生じること、③精通。`Abdolrahim Mogahi, ibid. p-67.

注45 `Abdolrahim Mogahi, ibid. p-72.

注46 公正 ('adalat) とは次のようなことである。

①公正 ('adalat) とは、常に禁欲・敬虔に勉める精神的姿勢であり、努めて禁止された行為 (ハラーム) を避け、義務 (vajeb) を行う姿勢である。また、大罪のみならず小罪も控えることであり、信仰に対する不注意や無関心を示す行為を控えること、また、勇気 (慣習や社会の威信) に矛盾する行為を避けることも、たとえそれが敬虔さにおいて欠けるところがあるとしても、公正 ('adalat) において信頼を築く。

②人の公正さを確定する方法は、二人の人物の証言、公正である事への信頼と世評をもたらす社会的交際、人に知識をもたらすという評判（例えば人々の間にいるモジュタヒドや知識人で、公正であることで有名であることなど）、よき行いと注意深く聖法を行い、社会に加わることである。

③公正でないモジュタヒドにタグリードすることは許容 (jayeز) されない。たとえ、そのファトヴァが信頼の置けるものであっても、彼自身の行動面での信頼を必要とする。Abdolrahim Mogahi, ibid. pp-79~80.

注47 'Abdolrahim Mogahi, ibid. pp-73~77.

注48 'Abdolrahim Mogahi, ibid. p-113.

注49 'Abdolrahim Mogahi, ibid. pp-80~81.

注50 'Abdolrahim Mogahi, ibid. pp-85~87.

注51 'Abdolrahim Mogahi, ibid. pp-113~118.

注52 これ以外には次のような場合がある。

⑤マルジャエ・タグリードがファトヴァを出す代わりに、エフティヤートとのべ、その前後にそれに反するファトヴァを出さない場合。

⑥マルジャエ・タグリードが問題があるところ、あるいは控えるところとするとき。

⑦マルジャエ・タグリードが義務 (vajeب) のエフティヤート、絶対的無制約のエフティヤート、或いは必要なエフティヤートと述べるとき、'Abdolrahim Mogahi, ibid. pp-116.

注53 その他、次のような場合、ロジュ (roju) は禁じられる。②マルジャエ・タグリードがその見解を推奨のエフティヤート、ファトヴァ、ホクムの形で説明したとき。③マルジャエ・タグリードが自分の見解をエフティヤートと述べ、その意図するところが推奨である場合。'Abdolrahim Mogahi, ibid. pp-117~118.

注54 例えば、この3名の内、レサーレをまだ著していないハーメネイ師を除いた二人：ランキャラーニー師とタブリージー師のレサーレでは死者へのタグリードを義務 (vajeب) とするという内容のファトヴァを確認することができない。ただし、上記細則もホメイニー師のレサーレではなく tahrir al-vasile の引用となっており、必ずしもレサーレに記されている保証はない。

注55 Ayatollah al'ozma Mokarem Shirazi, "Resale ye touzihe al-Masa'el", Madorase al-Imam 'Ali ibin Abi Talib ,p-7.

注56 'Abdolrahim Mogahi, Resaleye nemune-Ahkame taqrid va ejtehad . . ., p-67.

注57 正確には5583万7163人、以下ここに引用した人口統計数値は "Iran statistical Yearbook,1373 (March 1994-March1995)", Islamic Republic of Iran Plan & Budget Organization Statistical Center of Iran に基づく。

注58 ハーメネイ師は1994年4月12日、コム・イスラーム教宣所の責任者をホメイニー期からの Ebaee Khorasani から農地分配本部モンタゼリー師代理をかつて勤めた Fazel Harandi (統制経済派) に更迭した。The Echo of Iran, Number 74, 1994. p-21. 及び拙著、「アーヤトッラー達のこと」p-71参照。

注59 Abulqasem Ya'qubi, "Marja'yat va Rahbar", Houze, 56-57, Khordad, Tir, Mordad, Shahrivar, 1372 (1993年), Daftare Tablighate Eslami ye Houze ye Olmi ye Qom,pp-183~198.

注60 Kayhane Havai, Dec. 14, & Dec. 21,1994.

注61 より詳しく次のように論じる。「社会には指導者が必要であり、それは一人でなければならない。その指導者は最も完成された人物でなければならないが、イマームお隠れの時代にあつて、その任務はイスラーム法学者 (ヴァリイェ・ファギーフ：法学者の長) にある」。Abulqasem Ya'qubi, "Marja'yat va Rahbar", Houze, 56-57, Khordad, Tir, Mordad, Shahrivar, 1372 (1993年), Daftare Tablighate Eslami ye Houze ye Olmi ye Qom, pp-183~198.

注62 Mohammad Sadeq Majinai, "Jaigah va Qalrmu ya Hokm va Fatva", Houze, 56-57, Khoradad, Tir, Mordad, Shahrivar, 1372 (1993年), Daftare Tablighate Eslami ye Houze ye Olmi ye Qom, pp-131~182.

注63 Kayhane Havai, Dec. 22, 1993, p-9.

注64 Kayhane Havai, Dec. 7, 1994, p-9.